

びわこの 考湖学

13

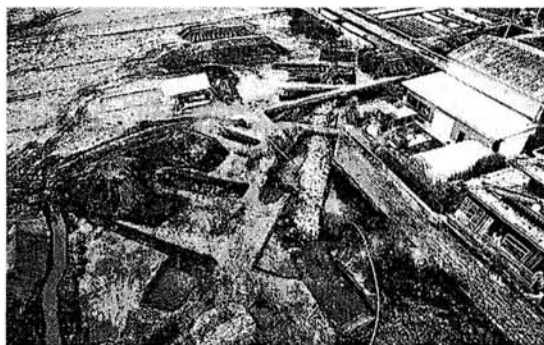
琵琶湖の港(湊)についてこれまで、実例をあげてたびたび述べてきました。こうした港の多くは水路と陸路の結節点という条件を備えた場所に成立するのですが、陸路が到達しがい湖岸部でも港と考えられる遺跡があります。

2. 併の間隔で板材を約30枚にわたって立て並べ、その間に礫を敷き詰めています。礫の間からは7世紀ごろの土器が出土しており、設置時期がわかりました。遺構の性格にはいくつかの説があります。

かつて琵琶湖周辺には内湖が多数ありました。内湖は堆積作用で埋まった湖岸に囲まれた水域で、水深が比較的浅く波穏やかで港としては格好の場所です。最大の内湖だった大中の湖の南にあった微高地(浜堤)一帯に広がる遺跡が大中の湖南遺跡です。今回は近年の発掘調査で見つかった浜堤の南側にある特殊な石敷遺構を紹介します。

一つの可能性として、突堤や棧橋といった港湾施設をあげることができません。石敷遺構は入り江の最奥部にあり、浜堤の南にあるもう一つの内湖(弁天内湖)に向かって突き出ていたことになりました。

大中の湖南遺跡



安土町と東近江市の境界に位置する大中の湖南遺跡。中央の石敷遺構は内湖に突き出た棧橋だったと推測できる

子を復元できるのです。

では、なぜ陸路から離れた湖岸沿いのこの場所に港が成立したのでしょか。琵琶湖の水上交通は湖上交通と琵琶湖へそそぐ河川を利用した交通から構成されます。琵琶湖は比較的水深が深いため大型



大中の湖南遺跡周辺図。湖岸線は干拓以前の明治21年に作成された地図による

船が使えますが、河川は水量が一定せず水深も浅いために小型船しか使えません。そうなる河川から琵琶湖へ、あるいは琵琶湖から河川へ貨客を運ぶ場合、途中で積み替えが必要となります。その積み替え場所として、琵琶湖と河川との境界付近にあたる内湖はたいへん都合のよい場所といえます。

このように考えますと、内湖に突堤あるいは棧橋を設けた港が成立したことも十分うなずけるでしょう。大中の湖南遺跡は琵琶湖周辺の水路網の具体的なありさまを示す重要な遺跡といえるのです。

(滋賀県文化財保護協会 辻川哲朗)

内湖の棧橋物語る石敷遺構